

Title	『管子』を読む：君主の儉約と奢侈
Sub Title	Reading Guanzi (II)
Author	寺出, 道雄(Terade, Michio)
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	2020
Jtitle	三田学会雑誌 (Mita journal of economics). Vol.113, No.3 (2020. 10) ,p.411 (119)- 421 (129)
JaLC DOI	10.14991/001.20201001-0119
Abstract	
Notes	研究ノート
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-20201001-0119

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

研究ノート

『管子』を読む
——君主の儉約と奢侈——

寺出道雄*

(1) はじめに

この小稿では、前稿（寺出（2020））に続いて、全 8 類・86 篇からなる『管子』のうちから、第 1 類「経言」に属する第 5 篇「乗馬」篇の一節と、第 4 類「短語」に属する第 35 篇「侈靡」篇の一節と、第 8 類「軽重」に属する第 71 篇「事語」篇の全部とを読む。その三者は、『管子』における経済論を知る上で、それ自身が興味深いし、『管子』の経済論の展開を知ることにも役立つと思われるからである。

すなわち、『管子』の全体は、戦国時代（前 5 世紀～前 3 世紀）に成立した、管子、すなわち管仲の思想を最も古い時代に伝えた、「原『管子』」と呼び得る部分と、その「原『管子』」を、漢代（前漢。前 206 年～後 8 年）までの間に後人が敷衍した部分とからなるとされる。その

場合、「経言」類が、『管子』の最古層に属し、「短語」類や、管仲学派のうちの「軽重家」——経済論者——と呼び得る人々によって書かれた「軽重」類が、その後成立した層に属することは、広く認められている。したがって、「乗馬」篇と「事語」篇とを読むことは、『管子』の経済論の展開を端的に知ることにつながるのである。また、「侈靡」篇は、「事語」篇の位置付けを知るために役立つ。

以下、(2)の「『乗馬』篇を読む」では、簡単なようであり、実は、解釈が容易ではない「乗馬」篇の一節を「解説」する。(3)の「『事語』篇を読む」では、「事語」篇を読むとともに、『管子』の経済論の展開について一瞥する。その際、「侈靡」篇についても触れる。(4)の「おわりに」では、本稿での展開について、簡単にまとめる。

なお、管夷吾、字は仲は、現在の安徽省阜

* 慶應義塾大学名誉教授

前稿および本稿の初稿に対する本誌チェッカーの貴重なご教示に感謝申し上げます。ご教示にしたがって、誤りをただした他、そのご教示にしたがって叙述を改善した部分があります。

陽の人である。生年は知られないが、春秋時代の人である。若いときには商売に従事したこともあるが、何度か仕官もした。後、齊に行き、公子糾に仕えた。齊室の内紛のために糾は殺され、彼と敵対する小白が桓公として齊を継いだ。仲は一時殺されそうになったが、親友である鮑叔の進言によって助命され、一転して桓公の宰相となった。宰相としての仲は、農業・製塩業等、経済の振興に努めた。そうした経済力の増大を基礎として、桓公は、周王朝の名目的な存続のもとで、覇者となった。宰相として、仲はしばしば桓公をいさめた。没年は、前 645 年である。

(2) 「乗馬」篇を読む

まず、「乗馬」篇の問題の一節を、遠藤哲夫による書き下し文によって読んでみよう。「乗馬」篇では、朝廷とは何か、市場とは何か、といった問題について簡潔に答えるという展開の中で、貨幣とは何か、という問題について次のように述べられている。

黄金は用の量なり。黄金の理を弁ずれば、則ち侈儉を知る。侈儉を知れば、則ち百用節す。故に儉なれば則ち事を傷り、侈なれば則ち貨を傷る。儉なれば則ち金賊く、金賊ければ則ち事成らず。故に事を傷る。侈なれば則ち金貴く、金貴ければ則ち貨賊し。故に貨を傷る。貨尽きて而る後に足らざるを知るは、是れ量を知らざるなり。事已みて而る後に貨の余り有るを知るは、是れ節を知らざるなり。量

を知らず、節を知らざるは、之を有道と謂う可からず。(『管子』 pp. 83-84.)

原文は、以下である。

黄金者用之量也。弁於黄金之理，則知侈儉。知侈儉，則百用節矣。故儉則傷事。侈則傷貨。儉則金賤，金賤則事不成。故傷事。侈則金貴，金貴則貨賤。故傷貨。貨尽而後知不足，是不知量也。事已而後知貨之有余，是不知節也。不知量，不知節，不可謂是有道。(『管子』 pp. 83-84.)

この一節は、一読して、リズムカルで簡潔な、いかにも古典たるに相応しい文章であることは分かる。しかし、直ちにその内容を把握出来るものではない。

そのことは、遠藤による現代日本語訳やリケットによる英訳を読んでみても分かる。

遠藤訳は、次のようである。

黄金は消費の尺度を示すものである。黄金すなわち貨幣価値の原理を明確にすれば、財政の放漫と引締めを理解することになる。放漫と引締めとを理解すれば、すべての消費が節度をそなえるようになる。つまり、財政を引締めれば生産に害をもたらし、財政を放漫にすれば、物資に害をもたらすのである。それというのも、財政が引締められれば儉約となって貨幣価値が下落し、貨幣価値が下落すれば購買力は低下して生産力があがらなくなるのである。それゆえ生産に害をもたらす

ことになる。また、財政が放漫になれば奢侈となって貨幣価値が上昇し、貨幣価値が上昇すれば物価が安くなって購買力が高くなるのである。それゆえ物資に害をもたらすことになる。物資が無くなってから、そこで始めて足りないことに気づくのは、需要の量を知らないためである。生産事業が終わったあとに、始めて物資に余剰のあることに気づくのは、供給の節度を知らないためである。需要と供給の適切な量を知らず、その節度をわきまえないのは、これを正しい方法を会得したものとはいえないのである。（『管子』 p. 84.）

また、リケット訳は、次のようである。

Gold is the measure of expenditures. If the prince is discerning in the management of gold, he understands the difference between extravagance and penuriousness. If he understands this, his expenditures will be properly controlled.

Now, penuriousness harms production; extravagance wastes goods. Penuriousness leads to a fall in the value of gold, and when gold is cheap, production declines, it is for this reason that penuriousness is harmful to production. Extravagance leads to a rise in the value of gold, and when gold is high, the value of goods is depressed.

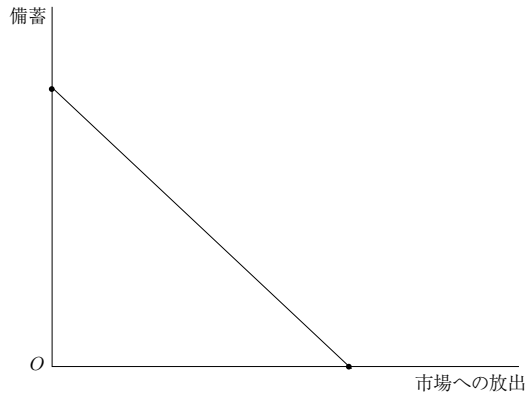
It is for this reason that extravagance causes goods to be wasted.

If it is only after goods are exhausted that one realizes there is a shortage, this is not knowing how to exercise proper measure. If it is only after production has ceased that one realizes there is a surplus of goods, this is not knowing when to be economical. When the prince does not know how to exercise proper measure nor when to be economical, he cannot be said to possess the proper way. (*Guanzi* p. 119.)

さて、まず、遠藤訳に対して感じる疑問の要点は、そこで、「財政が引締められれば……貨幣価値が下落し」「財政が放漫になれば……貨幣価値が上昇し」とされていることである。財政が引締められればデフレーションとなって、物価は低く、貨幣価値は高くなるはずである。逆に、財政が放漫になれば、インフレーションとなって、物価は高く、貨幣価値は低くなるはずである。遠藤訳では、そうした因果関係についての取り違えが生まれているのである。

一方のリケット訳は、遠藤訳よりも原文に近く、より分かりやすい。しかし、その訳では、君主 (prince) の「吝嗇」 (penuriousness) が金 (貨幣) の価値を低くし、「浪費」 (extravagance) が金 (貨幣) の価値を高くする、という因果関係の理路は、はっきりとしない。君主の「吝嗇」は、物価を低くし、貨幣価値を高くし、その「浪費」は、物価を高くし、貨幣価

図 君主による備蓄と市場への放出



値を低くするのではないか、という遠藤訳に対するのと同型の疑問が生まれるのである。

そうした取り違えが生まれる原因は、結論的にいえば、以上の両訳がともに、財政の「放漫」と「引締め」との対比、あるいは君主の「浪費」と「吝嗇」との対比を、暗黙のうちに、君主による貨幣支出の大小の問題として捉えていることにあると思われる。君主による貨幣支出の大小を問題とすれば、そうした理解と原文における、「儉則金賤、……侈則金貴」という叙述との間で矛盾が生じてしまうのである。

しかし、『管子』の世界では、租税は穀物等の現物で納められ、君主が支出するものも、第一義的には穀物等の現物なのである。

そうした理解のもとで、上記の一節を読んでみる。そこで、その一節を統合的に理解するために、次のような単純化した事態を想定してみよう。

君主は、その租税を穀物の現物で受け取る。

君主は、その租税収入を、自ら消費するか、次節で述べるような理由から備蓄するか、奢

侈品を購入する貨幣を取得するために、市場に放出するかを決定する。すなわち、

$$\text{租税収入} = \text{自己消費} + \text{備蓄} + \text{市場への放出} \quad \text{①}$$

である。ここで、租税収入と自己消費は所与で一定であるとする。そうすると、君主は、租税収入から自己消費を減じた、所与で一定の穀物量を備蓄と市場への放出とに自由に分割出来ることになる。こうして、君主にとって実現可能な、備蓄と市場への放出との組み合わせを知ることが出来る。縦軸に備蓄量を取り、横軸に市場への放出量を取った図を考えると、縦軸・横軸ともに正の切片をもった、傾き -1 の右下がりの線分を得ることが出来る。これは、君主の選択可能線と呼ぶことが出来る(図)。

その場合、君主は、選択可能線上で、備蓄を大きくし、市場への放出を小さくすることが出来る。この場合は、君主は、備蓄を奢侈品の消費より好むことになるのであるから、その君主は、「儉約」とであると定義出来る。逆に、

君主は、選択可能線上で、備蓄を小さくし、市場への放出を大きくすることが出来る。この場合は、君主は、奢侈品の消費を備蓄より好むことになるのであるから、この君主は、「奢侈」であると定義出来る。

一方、この国の市場では、それぞれの市場への参加者が持ち寄った物資は、残らず売り切れるとする。ただし、その市場で穀物について成立する価格は、市場への貧しい参加者には、穀物の消費量が足りないと感じさせるような、高い価格であることもあり得る。この状態を、物資が「不足」した状態（「事を傷」る状態）であると定義し得る。またその価格は、市場への貧しい参加者にも、穀物を粗末に扱わせるほどに、低い価格であることもあり得る。この状態を、物資が「過剰」の状態（「貨を傷」る状態）であると定義し得る。つまり、市場に持ち寄られた物資が売れ残ることはないものの、それらが販売される価格は、市場への参加者の欲望に対して「不足」であったり、「過剰」であったりするのである。

前稿（寺出（2020））で読んだ、「軽重」類に属する第73篇「国蓄」篇によれば、穀物の価格が低ければ、民は穀物を豚や犬の餌にするのであり、それが高ければ、道に餓民が横たわることになるのである。（『管子』p.1152.）「乗馬」篇における「貨を傷」とは、「物資が損なわれる」という意味であり、「事を傷」とは、その安定が市場での取引（「事」）の結果であるべき、「民生が損なわれる」という意味である、と思われるのである。なお、「国蓄」篇では、市場で穀物が売れ残ることがあり得るとしているように読み取れるが、議論を簡

単にするために、上記のように想定しておく。

さて、この市場が均衡したときに成立する物価は、

$$\text{貨幣量} \times \text{貨幣の流通速度} = \text{物資量} \times \text{物価} \quad \textcircled{2}$$

という関係を満たす。ここで、左辺の貨幣量×貨幣の流通速度の値は所与で一定であるとする。

そうすると、君主が「儉約」であれば、市場で流通する物資量は小さくなる。そうすれば、②式の等号が成立するためには、物価は高く、貨幣価値は低くなることになる。すなわち、君主が「儉約」であれば、物資は「不足」することになる。一方、君主が「奢侈」であれば、市場で流通する物資量は大きくなる。そうすれば、②式の等号が成立するためには、物価は低く、貨幣価値は高くなることになる。すなわち、君主が「奢侈」であれば、物資は「過剰」であることになる。

以上のように単純化して設定すれば、問題の一節は、次のように、現代日本語訳出来ることになる。

貨幣は、それによって得られる物資の量を示す存在である。貨幣の原理を知れば、君主が奢侈であること、すなわち奢侈品の購買のための物資の放出量が大きいことと、儉約であること、すなわち奢侈品の購買のための物資の放出量が小さいこととの効果を知ることが出来る。奢侈と儉約とを知れば、物資の需要と供給とは適切な水準で均衡する。すなわち、君主が儉約を好めば、物資は不足し、民

生を損ない、奢侈を好めば、物資は過剰であり、物資を損なうことになる。君主が儉約を好めば、貨幣価値は低く、貨幣価値が低ければ、物価は高い。それゆえに、民生を損なうのである。君主が奢侈を好めば、貨幣価値は高く、貨幣価値が高ければ、物価は低い。それゆえに、物資を損なうのである。物資が売り切れた後に、物資に不足する者がいることを知るのは、君主による物資の放出量が小さすぎるからである。市場が閉じた後に、物資が過剰であることを知るのは、君主による物資の放出量が大きすぎるからである。物資の放出量の適度を知らないことは、正しい経済原理を知らないことである、というべきである。

このように理解すれば、君主による租税の中からの物資の適切な市場への放出量、したがって奢侈品の消費量は、市場への貧しい参加者にも、物資が「不足」しているとも、「過剰」であるとも、感じさせることがないような量であることになる。君主の政策は、「儉約」と「奢侈」との間で、中庸のとれたものでなければならぬのである。

すなわち、「黄金之理」とは、貨幣数量説的な因果関係を示した貨幣論であったことになる。君主が、その貨幣数量説的な因果関係を利用して、物資の市場への放出量を適切に選ばば、市場において適切な均衡をもたらすことが出来るのである。したがって、「黄金之理」とは、貨幣論であると同時に財政論でもあったことになる。

「乗馬」篇の一節の内容を以上のように確定した上で、次節において、君主による「儉約」

と「奢侈」との選択の問題に焦点を当てて、「軽重」類に属する、第71篇「事語」篇を読んでみよう。「事語」篇は短いものであるので、その衍文を除いた全文を読む。

(3) 「事語」篇を読む

「事語」篇は、次のようなものである。その解釈には困難はないので、遠藤訳を参考にして、現代日本語訳のみを示しておこう。

桓公が、管子に問うていった。

「生産を増大させて、国の経済を順調に運営する方法を聞かせてもらえるだろうか。」

管子は、答えて、

「生産を増大させて、国の経済を順調に運営するとは、どういう意味でありましょう。」

桓公は、

「泰奢という者がいうのに、『帳や蔽いが立派に飾られず、衣服が多くなければ、女達の仕事は十分でないことになります。また、祭事には必ず犠牲の動物を供え、諸侯は牛・羊・豚を用い、大夫は羊・豚を用いなければならないようにすべきです。そのようにしなければ、家畜の飼育は十分に行なわれないことになります。さらに、宮殿の楼閣を高くし、その部屋を美しく飾りたてなければ、木材は売れることはありません。』この泰奢の言はどのように理解すべきであろうか。」

管子は、答えて、

「それは正しい教えではありません。」

桓公は、
「なぜ正しい教えではないのか。」
管子は、答えて、
「領土が狭く、しかも大国と争おうとする国は、国に穀物の備蓄がなければ、民を使役することは出来ません。穀物の備蓄がなければ、民を動員することは出来ないのです。泰奢の教えは、我が国のように、領土が狭い小国には当てはまらないのです。」

桓公は、いった。
「よく分かった。」

桓公は、また、管子に問うていった。
「佚田という者がいうのに、『善い君主は、自らが所有するのではない物資や自らの国の民でない民を用いるべきです。なぜ同盟国の権力を利用することによって、天下を制さないのですか。』この佚田の言はどうであろう。」

管子は、答えて、
「佚田の言は正しくありません。善い君主は、国内の土地を開墾し、民を国に留まらせるようにするものです。穀物の倉庫に穀物が満ちれば、民は礼節を知るものです。穀物の備蓄がなければ、敵に包囲され、城壁がもろければ、敵に突破されます。国内を安定させなければ、天下を我が物とすることは出来ません。佚田の言は正しくありません。」

管子は、さらに、
「毎年、一の穀物を備蓄すれば、十年にして十になります。毎年、二の穀物を備蓄すれば、五年にして十になります。備蓄

量が十になったときに、五を備蓄したままにして、残りの五を絹製品に換えて交易を行ない、この操作を毎年繰り返せば、備蓄の追加と交易による利益とによって、国には収穫の十年分の穀物の備蓄が出来ます。富んだ国は貧しい国に勝ち、勇敢な国は怯懦な国に勝ち、知者の国は愚者の国に勝ち、有能な者の国は無能な者の国に勝ち、義を備えた国は不義の国に勝ち、熟練した兵士の国は未熟練な兵士の国に勝ちます。十分な備蓄を有する国は、これら六つの勝利の要因をすべて備えています。それ故、開戦に至ることは風雨のごとく、行動することは雷電のごとくであります。自国の進退は自国のみのものであり、それを妨げる者をなくし、同盟国を頼りにしたりなどはしないでおくべきなのです。それゆえ佚田の言は正しくありません。」

桓公は、いった。
「よし。」(『管子』 pp. 1134-1137.)

ここでの泰奢の議論は、有効需要による国民所得の決定論によって説明出来る。

この国の経済の総需要は、民間の消費需要と君主の奢侈品に対する需要との合計に等しい。その場合、民間の消費需要と君主の奢侈品に対する需要とは、加算が可能であるように、穀物であれ、貨幣であれ、共通の尺度に還元されて計られているとする。すなわち、古代の経済において、民間の投資需要は無視し得るから、その総需要は、

総需要 = 民間の消費需要 + 君主の奢侈品需要

③

で決定されるのである。ここで、『管子』における展開に勝手な解釈を付け加えないために、民間の消費需要の値は、所与で一定であると考える。

そうすると、国民所得は、③式で示された総需要に等しい水準で決定される。この場合、君主が「奢侈」であり、その奢侈品需要が大きければ大きいだけ、国民所得は大きいことになる。

泰奢の議論は、有効需要による国民所得の決定論の古代専制国家版であり、そのような論拠によって、君主に対して「奢侈」が勧められるのである。地代の取得者への「奢侈」の勧めは、ケインズが自らの理論の先蹤者として名前を挙げた、マルサスの主張を想起させる。

なお、「奢侈」の勧めは、管仲とされる人物の発言にもある。「侈靡」篇には、桓公との対話における管仲とされる人物の発言として、次のような言葉がある。やはり、遠藤訳を参考にして、現代日本語訳を示せば、以下のようである

「墓穴を大きくすることは、貧しい民を雇用することになります。墓を美しく飾ることは、職人に仕事を与えることになります。棺を大きくすることは、大工に仕事を与えることになります。遺体とともに埋葬する衣服を多くすることは、女達の仕事を増やすことになります。」(『管子』 pp. 644-645.)

この議論が、泰奢の議論と同類のものであることは、明らかであろう。

有効需要論は、管仲学派内でも説かれていたのである。しかし、残念なことに、「侈靡」篇は、全体としてのまとまりを欠いた篇であり、まとまりを備えた「事語」篇での議論とは異なるのである。

その点を確認した上で、「事語」篇での対話の検討に戻ろう。泰奢の議論に対して、「事語」篇において管仲とされる人物は、国の潜在的な軍事力を強化すべきであるという観点から、泰奢の議論を批判する。租税からの備蓄の究極的な目的は、戦争に備えての潜在的な軍事力を意味する物資の備蓄にある、という理解である。

先の図から分かるように、君主は、その租税収入から自己消費分を減じた残りを、備蓄と市場への放出とに任意に分割することが出来る。市場への放出は、奢侈品の購入に充てられるのであるから、君主は、選択可能線上にある任意の点で、備蓄量と奢侈品の消費量との組み合わせを選択することが出来るのである。しかし、君主は、その選択可能線上で、備蓄量が大きく奢侈品の消費量が小さい点を選ばなければならない。たとえ彼個人の選好が「奢侈」であったとしても、国の潜在的な軍事力を強化するためには、君主は、「儉約」であり、その選択可能線上で備蓄量が大きな点を選ぶ必要がある。君主は、君主としては、備蓄を奢侈品の消費よりも強く選好するような選択態度を取らなければならないのである。こうした「奢侈」に対する「儉約」の重視は、ひとまずは、「奢侈」と「儉約」との間での中

庸を説く、「乗馬」篇における議論とは異なっている。

そこで、民生を安定させることを「富国」政策と定義し、潜在的な軍事力を強化することを「強兵」政策と定義してみよう。そうすれば、泰奢の議論と管仲とされる人物の議論とを対比した場合には、泰奢は、「富国」を主張し、管仲とされる人物は、「強兵」を主張していることになるのである。

しかし、興味深いことは、管仲とされる人物が、そうした選択を、「領土が狭い小国」にとって必要であるという限定を付して、主張していることである。領土が広い大国を考えれば、君主の選択可能線そのものが、原点からより遠い方向に拡張され得る。そうすれば、大国の君主は、小国の君主と比べて、市場への放出量と備蓄量との双方、あるいは一方を増大させ得ることになるのである。管仲とされる人物が、有効需要論を原理的に否定しているのではないことは印象的である。同一の政策的な主張も、それが適用される国の条件によって有効性が異なってくるということであろう。

それでは、泰奢の議論を小国については否定するとして、その小国にとって、民生を安定させる「富国」政策と、潜在的な軍事力を強化する「強兵」政策とを両立させる道はどのようなものであろうか。

それは、国内の未利用の土地を開墾し、穀物の生産を増大させる政策である。未利用の土地を開墾し、そこで穀物を生産させれば、その穀物の生産量だけ、国の経済規模は増大する。すなわち、経済は成長する。そうした経

済の成長は、君主の選択可能線を拡張し得る。そこでは、市場への放出量と備蓄量との双方、あるいは一方を増大させ得る可能性が生み出されるのである。

つまり、奢侈品の需要の増大による「富国」政策に頼るのではなく、穀物の供給を増大させることが、小国にとって「強兵」政策と両立し得る「富国」政策なのである。「儉約」と「奢侈」という概念に戻れば、経済の成長は、その両者の対立を、中庸において解決することにつながる道なのである。一国の経済のあり方を論じる場合、需要側の要因を重視する見解と、供給側の要因を重視する見解との対立は、古代中国にも存在したことになる。

さて、「事語」篇の特徴は、経済の成長が、君主による経済の運営において、「儉約」と「奢侈」との両者を、単なる対立に終わらせないための方策であることが明示されていることだけではない。

そこで印象的であるのは、伏田の主張への批判において見られるように、その穀物の備蓄を利用して、君主が商業活動を行なうべきである、とされていることである。備蓄は、穀物倉庫で眠っているだけではなく、市場への出入りを繰り返すことによって、君主により大きな穀物の備蓄をもたらすのである。すなわち、君主は、穀物の価格が高いときには、その備蓄を放出して絹製品に換え、穀物の価格が低いときには、その絹製品を穀物に換える、という操作を繰り返すことによって、利潤を得て、穀物の備蓄を増やしていくべきなのである。

君主自身が商業活動を行なうべきであると

いう主張は、前稿（寺出（2020））で読んだ、第73篇「国蓄」篇にも見られる。しかし、「経言」類には、そうした主張は見られない。

といて、「事語」篇の作者が、「経言」類を学んでいなかった訳ではない。

伏田の主張についての議論の中で、管仲とされる人物は、「善い君主は、国内の土地を開墾し、民を国に留まらせるようにするものです。穀物の倉庫に穀物が満ちれば、民は礼節を知るものです。（壤辟举，則民留处。倉廩実，則知礼節。）」と述べている。この文章は、遠藤が指摘（『管子』p.1137.）するように、「経言」類の劈頭、したがって、『管子』全体の劈頭におかれた第1篇「牧民」篇にある、「地辟举，則民留处。倉廩実，則知礼節。」（『管子』p.13.）という文章と、「地」という言葉が、同義語である「壤」という言葉に置き換えられているだけで、ほぼ同一である。「事語」篇の作者は、「牧民」篇を含んだ「経言」類に代表される、「原『管子』」を学んでいたのである。

以上のように見てくれば、『管子』における経済論が、「経言」類における原理的な展開から、「軽重」類に典型的な、覇者たることを目指す君主のための経済学としての、より具体的な政策提言へと敷衍されていったのであることを、了解し得るであろう。「事語」篇では、租税収入のうちからの備蓄と奢侈品の消費のための市場への放出とへの分割の問題が、その備蓄が潜在的な軍勢力として機能することが明示されることによって、具体化される。それとともに、叙述が、桓公と管仲とされる人物との対話に仮託されることによって、分かりやすい「物語」化もされるのである。

管仲自身は、先に見たように、桓公を覇者の地位に押し上げる上で大きな役割を果たした人であった。「事語」篇は、そうした管仲の事績を、後人が、同盟国に頼らずに自力で覇者たることを目指す君主のための教訓を管仲自身が語る、という形式で表現したものであろう。

「乗馬」篇における貨幣数量説そのものについていえば、貨幣数量説にもとづく展開は、前稿（寺出（2020））で読んだ、「軽重」類に属する第74篇「山国軌」篇にも見られる。その場合にも、「山国軌」篇における展開は、君主への経済政策の提言として具体化されている。それとともに、叙述が、桓公と管仲とされる人物との対話に仮託されることによって、分かりやすく「物語」化もされているのである。

そうした『管子』の経済学における展開について考える場合、興味深いのは、「侈靡」篇における管仲とされる人物や、「事語」篇における泰奢に象徴されるような、広く管仲学派には属するものの、狭く「軽重」類の作者達である「軽重家」には属さない経済論者が存在していたことが、分かることである。『管子』は、管仲学派の幅の拡がりの大きさを、したがって、『管子』の成立期において、管仲学派の内部で多彩な経済学説が展開されていたことを、垣間見させるのである。『管子』は、しばしば矛盾や重複の多い、まとまりの悪い書であると評される。しかし、まとまりが悪いだけに、経済論において、「原『管子』」から分岐したと思われる複数の思考様式が存在したことを知る事が出来るのである。

(4) おわりに

以上、「乗馬」篇、「侈靡」篇の一節と、「事語」篇とを読むことによって、「原『管子』」が、「軽重家」によって、より具体的な状況に応じた政策提言へと展開されていった様相の一端を見てきた。

「軽重」類の現存する諸篇は、議論文体である「国蓄」篇と、経済論ではなく、本来、他類に属すべき篇が、「軽重」類に紛れ込んだものであると推定されている、第85篇「軽重己」篇とを除けば、すべて桓公と管仲との対話に仮託された対話体で展開されている。齊の名宰相としての管仲の名前は、広く知れ渡っていた。「軽重家」達は、管仲の事績を、管仲自身の発言とすることによって、語り伝えていったのであろう。

なお、おわりに、その「軽重家」の主張を取りまとめた「軽重」類の成立時期についての推測を述べておこう。

金谷治は、現代日本においては、唯一の『管子』全体の研究書である、金谷(1987)において、前稿(寺出(2020))でも紹介したように、「軽重」類の成立時期について、それを漢(前漢)代であるとしている。しかし、「軽重」類の諸篇で扱われている政治状況は、「事語」篇にも明らかなように、群雄が相争う状況である。漢による統一王朝の成立後に、そうした群雄が相争う状況について語ることは、アナクロニズムに類することになるはずである。

「軽重」類の諸篇が、リアリティーをもって語られ得る状況は、漢による中国の統一に先立った時代であろう。

浅学を省みずにいえば、「軽重」類の大部分の成立を、戦国時代のうちに求める方が説得力があるように思われるのである。『管子』全体は、戦国時代のうちにはほぼ完成されていたと想定することも可能であろう。もっとも、同じ「軽重」類に属する篇でも、第83篇「軽重丁」篇や第84篇「軽重戊」篇は、桓公と管仲とされる人物との対話体で展開されているものの、その内容は笑話めいており、緊張感を欠く。その内容も、文体も、格調の高い「経言」類の諸篇とは対極にある。それらは、漢代に入って天下が安定した状況のもとで書かれたものかもしれない。

主要参考文献

- 『管子』(1989・1991・1992) 遠藤哲夫『管子』(新釈漢文大系) 上・中・下, 明治書院, 所収。
Guanzi (2001) Rickett, W. A., *Guanzi: Political, Economic, and Philosophical Essays from Early China*, Vol. I, Cheng & Tsui Company, 所収。
遠藤哲夫(1989)「管子 解題」前掲遠藤『管子』上, 所収。
金谷治(1987)『管子の研究——中国古代思想史の一面——』岩波書店。
水上健造(1975・1976・1985・1989)「『管子』経済論の一考察」1~4『和光経済』第8巻第1・2号, 第9巻第2号, 第18巻第1号, 第22巻第1号。
寺出道雄(2020)「『管子』「国蓄」篇を読む——君主と市場——」『三田学会雑誌』113巻2号。